

# Gift for the Next 100 Years

Vol.6

2012年2月11日、東京YMCA社会体育・保育専門学校を会場に、グリーンキャンプ・フォーラム「楽しむ場所、悲しむ場所としてのキャンプ〜グリーンワークとしてのキャンプの可能性を考える〜」を実施しました。ここではその様子をアイルランドからお招きしたテリー・ディグナンさんの基調講演部分を中心にご紹介します。

テリーさんは、重い病気の子どもたちやその家族を対象としたキャンプを行う Hole in the Wall Camps のひとつである Barretstown で長くキャンプ運営に携わり、そこで2つのタイプのグリーンキャンプを作り上げてきました。異なる文化的背景を持つ対象に応じた運営上の配慮は、アメリカの事例を参考に日本でのグリーンキャンプを作り上げようとしている私たちにとって、非常に参考になるものです。

## アイルランドの家族を対象としたキャンプ

1995年にこのキャンプを始めたのですが、当時のアイルランドでは、子どもは「死」を理解できず、家族の死にもあまり影響を受けないと一般的に考えられていました。また、死を祝福すべきこととして扱うという伝統的な文化もありました。もちろん、子どもが亡くなるのは不自然なことですが、死は基本的にその人が人生をまっとうした結果であるというのが基本的な死の受け止め方なのです。そんなこともあって、子どもを葬式などの喪の作業に参加させないほうがいいんだというのが、アイルランドでは一般的だったのです。ですから、このキャンプを行うためには大きな文化的障壁を乗り越えなければなりません。



私たちは、親と子どもがお互いに家族の死によってどのように悲しみを経験しているのかを知ってもらうことが大切だと思いましたが、家族をひとつの単位としました。キャンプの規模は12〜15家族で、すべてが最近、身近な人の死を経験した家族です。

キャンプへは18か月の間に3回来ていただきますが、参加回数の異なる家族がいっしょになるように設定しています。グリーンワークというのはプロセスですから、初めて参加する家族が2回目の家族から話を聞くことで、自分たちのグリーンが普通のことだと気づくことが期待できるのです。

このキャンプの鍵は、物理的、感情的（精神的）に安全な場所を提供することです。グリーンを経験している人は、楽しそうにしたらまずいんじゃないかと思ったり、笑っているから悲しくないんだと決めつけられることに恐れを感じています。ですから、泣いても笑っても、話をしても、黙っていても構わない、そんな場所を提供すること、決してそこでは評価されないという環境を提供することが大事なのです。



物理的な環境に比べると、精神的に安全な環境づくりは難しいですから、スタッフはきちんとトレーニングを受け、共感できるようになっていることが大事です。安全な環境を提供できれば、今まで避けてきた困難にチャレンジでき、キャンプの成功率は高まります。

3日または4日間のキャンプ期間中に、計4時間のグリーンワークの時間を持ちます。子どもと大人では発達レベル、経験レベルが違うので、グリーンへの対応に関するニーズも異なります。だから、それに合わせたプログラムを作ることが大事です。また、アイルランドの文化では、親も子どもも亡くした人のことについて話す経験を持っていないことが多いので、「ふりかえり」を重視します。話さなくてもいいので、ふりかえてみるのが大事なのです。多くの家族が今の状況に縛られて、一歩も前に進むことができないと感じています。そうではなくて、未来に向かって進めるよう、一歩を踏み出してもらうことに手を貸すのが、この時間の目的です。

もちろん、遊びの時間も大変重要です。子どもが亡くなった家族で、親がその子どものことばかりを思って、生きている子どもの世話をしなくなるということが、時折起こります。そうすると、子どもは別の意味で親を失ってしまい、傷つきます。しかし、遊びの

# グリーンフキャンプ・フォーラム

## ～グリーンワークとしてのキャンプの可能性を考える～

時間の中で子どもたちが遊び始めるのを見ることは、親が子どもに再び関心を持つきっかけになります。子どもが子どもに戻っていくのを見るのが回復につながるのです。

また、遊びの時間の中で親が笑っていたり、話をしたり、活動に参加するのを見ると、子どももまた自分も笑っていいんだと思えます。子どもというのは親のまねをするものですから、親自身が笑顔を取りもどすことは、子どもに「笑っていいよ」と許可を与えるのと同じことなのです。

### ベスラン学校占拠事件の被害家族を対象としたキャンプ

2004年には、ロシアで起きたベスラン学校占拠事件の被害者の家族17組を受け入れました。この事業は、文化的違いによって大きな困難がありました。

アイルランドの家族を対象としたプログラムでは家族全体を受け入れたのですが、ベスランでは男性は社会的に女性と交流しないという文化を持っていて、母親と子どもはいっしょに活動できても、父親は同席しません。ですから、このグループの場合は、母子のグループと父親のグループに分けて活動しました。

母親と子どものグループには話したいという雰囲気があり、積極的に話してくれました。しかし、父親のグループは話したがない雰囲気でした。そこで、まず母子で話をし、その様子を父親のグループに聞かせることにしました。その後、どう思うかを聞いてみると、初めて少しずつ話してくれるようになりました。

また、ベスランの男性はものすごくお酒を飲むんですね。飲むといくらか話しやすい雰囲気になるので、スタッフで話し合っ、多少お酒を出すことにしました。これは極めて例外的な対応ですが、私たちの文化を押しつけるのではなく、彼らの文化を受け入れることが大事だという結論に至りました。

もうひとつ、このグループで大きな課題となったのは、その経験の悲惨さでした。彼らは、目の前で自分の家族が撃たれて殺されるという経験をしていました。このような極限とも言えるトラウマを経験した人には、2種類のダメージがあります。ひとつは心理的ダメージ、もうひとつは社会心理的ダメージです。私たちが対処しようとしているのは後者で、その経験をどのように社会的な経験として組み込んで、次に生きていくステップにつなげていくかが大事になります。PTSDといった心理的ダメージについては、私たちに是对処できず、やはり精神科医などの心理の専門家の支援が必要だと思います。

### 同じような経験が力になる

どんな人も、家族などの大切な人の死を経験することは避けられません。そのときにグリーンフを経験するのもごく当たり前のことです。グリーンフを経験した人にとっていちばんの恐怖は、亡くなった人のことを忘れてしまうのではないかとということだと思います。泣いていないと忘れるのではないかと、笑ったら忘れてしまうのではないかとという恐怖です。しかし、笑ったからといって忘れるわけはありません。ですから、「笑っていいんだ」と思える安全な場所が必要なのです。

私は20年以上、重い病気の子どものキャンプをやってきましたが、力を与えてくれるのは、同じような病気を経験した子ども、仲間(peer)です。それはグリーンフキャンプでも同じで、同じような経験が相互に支え合うネットワークを作るのです。



基調講演のあと、私たちの行うキャンプのスーパーバイザーを務めていただく西田正弘さん(てとてとて代表)との対談の時間が設けられました。そこでは、安全な環境づくりやスタッフトレーニングの重要性、日本におけるグリーンフケア普及の必要性などが確認されました。



テリーさんがキャンプを始めようとしたとき、アイルランドには組織キャンプを行う団体がほとんどなく、情報も皆無だったといわれています。そこでテリーさんは国際キャンプ連盟のメンバーの中に飛び込み、さまざまな情報を知ったり、支援する団体とのつながりを得たのだそうです。もちろん、文化的背景を考慮した対応は必要ですが、このフォーラムでも、先行事例に学ぶことはまだまだ多いと再確認することになりました。

当日行われた事例報告や対談を含む「グリーンフキャンプ・フォーラム抄録」を日本キャンプ協会WEBサイトで公開しています。  
<http://www.camping.or.jp/1202griefcampforum.pdf>